

白石市小原地区森林組合参事

片田 勝雄

組合の枠を超え、
「谷間の村」に安心と利便性を

【かただ かつお】

-
- 1910(明治43)年 小原村(現白石市)に生まれる
1943(昭和18)年 小原村森林組合に奉職
1949(昭和24)年 宮城県森林組合連合会技術員
養成講座を受講
1969(昭和44)年 宮城県森林組合職員連盟会長
(就任年不明) 白石市小原地区森林組合参事
1974(昭和49)年 9月4日死去

時代に取り残された「谷間の村」

片田勝雄の故郷は、七ヶ宿街道の宿場だった。

奥州街道の桑折（現福島県桑折町）と羽州上山（現山形県上市）を結ぶ峠越えの脇街道は、出羽以北の大名が参勤に使い、出羽三山を詣でる人々の信仰の道であった。

「あすは小坂の山を越えて雪の中に入るべし」

江戸の歌人が紀行文に記したように、とくに冬に桑折から小坂峠を越え進むには、苦難を覚悟しなければならなかった。一方で羽州側からあえぎながら山道を越えてきた旅人は、江戸までまだ一〇日も歩かねばならないのに、小坂峠から江戸が見えるとか、江戸まで一走りなどと言い、誇張気味に胸をなでおろした。この峠越えはそれほど険しい道だった。

片田の故郷下戸沢（現白石市）は、小坂峠を越えて二つ目の宿場である。明治以降は手前の上戸沢とともに行政上は小原村に属した。

小原村は、温泉がある小原地区と上戸沢・下戸沢地区から成ったが、旧街道に代わり白石と上山を結ぶ道（現在の国道一一三号）が主要道となると、村の中心は小原地区に移った。どちらも山深いことに変わりはないが、小原には温泉がもたらすのんびりした雰囲気がある一方で、上・下戸沢では山村の険しさが際立った。

こうした土地柄の違いは考えの違いを生む。一九五四（昭和二九）年、隣接する白

石市と当時の七ヶ宿村との間で合併はなしが持ち上がった。小原地区の人々は白石市との合併を希望し、上・下戸沢地区では七ヶ宿村との合併を望んだ。上・下戸沢の人々が、旧街道で繋がる方に愛着を持つのは当然のことである。意見の対立は住民投票に発展したが、結果は白石市との合併希望が多数を占めた。しかし、上・下戸沢の人々はそれを不服として白石市との合併に反対する運動を繰り広げた。

そのころ、四〇代半ばで、小原村森林組合（現白石蔵王森林組合）の要職にあった片田は、下戸沢生まれのものとして反対の立場に立ったが、それは単に感情的な理由ではなく、わずかな農地と林業に頼るしかない故郷の暮らしを守るためだった。

北に蔵王、南に小坂峠を望み、東西を白石と七ヶ宿に挟まれる片田の生まれ故郷は、歴史的には街道の要衝であったが、明治以降は地理的にも、また周辺の町村と比較した場合でも特色のない「谷間の村」となった。さらに戦後は人口流出が進み、高度成長からも取り残された。

そんな故郷のために片田は、林業と組合の枠を超え、協同の可能性を広げようとした。故郷の暮らしの安心と利便性を向上させるためには、それが最善で合理的な方法だったのだ。

先見性で故郷に新たな収入源を

片田が組合活動を始めたのは、太平洋戦争中である。

昭和一六年、宮城県森林組合連合会が設立。会では人材育成のため、森林組合技術員を養成する講習会を開催しているが、片田は昭和一九年まで年に一度開催された講習会に参加している。小原村に森林組合ができるのは、昭和一七年三月。片田は設立から関わっていたという話もあるが、正式に奉職するのは翌年、三三歳のときだ。すると講習会への参加は、入協後間もなく組合を代表し、新しい林業の技術と知恵を習得するためだったのだろう。

しかし戦時下の林業は、故郷の発展より「お国のため」が優先した。白石周辺の豊かなスギ、マツ林は強行伐採され、軍需資材として供出された。片田の組合では設立と同時に製材所を持っていたので、フル稼働で軍用材を産んだ。

多くの林業家にとってこのころは不本意な時代だったが、それは戦後もしばらく続いた。終戦後、全国で造林計画が実行されたが、労働力や苗木の不足、さらに食糧難に阻まれ計画は進まなかった。

色あせた山々に緑が取り戻されるのは、高度成長の足がかりとなる好景気が始まったころだ。昭和二六年、森林生産力の増強を目的にした森林法では、適正伐採期を定め乱伐を規制した。「山に木を植えよう」の合言葉は、山に生きるものだけでなく広

く一般のものとなり、植林運動が盛んになった。

白石地方では大鷹沢小学校の取り組みが学校植林コンクールで一位を獲得した。「白石市史」によれば、これが地域での緑化推進の大きなきっかけになったとある。違う集落の出来事とはいえ、片田にも勇気を与えたことだろう。組合ではこれより少し前から二つ目の製材所を稼働させていたので、飛躍の準備は万端整っていた。

片田の故郷では、明治から薪炭の生産が大きな収入源だった。上戸沢だけでも昭和二六年の木炭生産量は八三〇俵を超え、従事者一戸あたりの収入では八万円以上になった。当時の現金収入では大きな額である。しかし、昭和三〇年頃から灯油やガスが普及し、薪炭の需要は年々少なくなっていった。

片田は薪炭に変わる収入源を求めた。まず目をつけたのは、農水産物の出荷箱だ。小坂峠の向こうの伊達地方ではりんご生産が盛んだし、亘理や閑上では大量の魚が水揚げされるから木箱が必要になる。組合は片田の目論見通り、りんご農家から注文を取り付け、魚箱は塩竈に納めた。

また、二つの製材所から生まれる建材は質の高さが評判を呼び、福島や閑上の大工が鼻屑にしたほか、仙台の郊外に団地が整備されるころになると大口の注文も舞い込んだ。注文が別の注文を呼ぶ好循環。高評価の要因には品質もあったが、大工が使いやすいようあらかじめ決まった寸法に製材して出荷したこともあった。今でこそ規格寸法の製材は当たり前だが、当時は建築現場の手間を省く画期的なサービスだった。

片田は先見性の持ち主だった。「谷間の村」に居ながら時代の流れを読み解き、そこに自分たちの山の価値、製品の有用性を当てはめることができた。そして彼の先見性には、しっかりした計画性があった。立木の買付から伐採、搬出、製材まで手がけるには相当の労力を要したが、仕事を限れば小遣い程度の儲けにしかならず、薪炭に代わる収入源にはならないと考えた。わずかばかりの農地と林業で生きるしかない故郷をどのように豊かにするか、片田は模索し続けた。

故郷の暮らしに安心と利便性を

組合運営の中核を担いながら、片田は得意先への納品にも出向いた。塩竈へ魚箱を納めた帰りには、必要のなくなった箱いっぱい魚を買って故郷の人々へ届けたという。新鮮な魚に喜ぶ人々の笑顔は眩しかったが、同時に、街場と故郷の間で発展に大きな差ができていくのを感じていた。高度経済成長の風に乗れ、どんどん華やかになる街に比べ、故郷は時が止まったままのように思えたのだ。

山深いゆえに公共設備の普及も遅れ、上戸沢に上水道が普及したのは昭和二九年のことだ。下戸沢ではさらに普及が遅れ、沢水を生活用水にしていた。幸い重大な健康被害につながる問題は起きなかったが衛生上の不安は尽きず、上水道を望む声は日ごと強くなった。

小原村に合併問題が持ち上がるのはそんなときである。白石と七ヶ宿のどちらと合併するか。

片田の願いはただ一つ。故郷に安全で近代的な暮らしをもたらすことだった。だから、それが実現できればどっちと一緒になろうと構わなかった。ひとつ大きな問題は、白石と合併すると分収林での分収歩合が下がってしまうことだった。

分収歩合とは、土地の所有と森林の管理が異なる分収林で生じる収益を、そこに関わる者との間で分け合った後の利益のことで、それが下がることは収入減を意味した。せっかく新しい木材生産が軌道に乗ってきたのに、合併により利益が減るのは絶対に防がなければならない。片田が白石との合併に反対したのはそうした理由があったのだ。

とはいえ住民投票の結果を無視することはできず、町村合併を進める動きもあり、昭和三二年三月、小原村は白石市との合併を決め、即座に施行した。上・下戸沢の人々は、話の発端から合併を受け容れざるを得ないことを承知していたが、なしくずしにせず、自分たちの要望を合併条件に盛り込むことに成功した。

合併条件は一〇項目に及び、片田らの願いはほぼ実現されることになった。暮らしの安全と利便性のために消防設備の充実と、車社会に対応する道路を整備すること。懸案の分収歩合は、旧小原村の条例に則り従来通りとすることが決められた。さらに衛生的な生活のために診療所を充実させ、下戸沢に上水道を敷設することが決まった。

昭和三十一年一月、下戸沢に待望の上水道が通った。合併施行に先駆けた完成は、人々の要望がいかに強いものだったかを物語っている。

垣根を取り払い故郷の発展のために

水が通り、道が整い、安全な環境は整ったが、それでも故郷の暮らしは、時代に見合う華やかさには程遠いと片田は感じていた。

わが国での生活改善運動は、大正から昭和初期にかけて盛んになり、農村部でも高度成長の初期にはその目的を達成したと捉えられるが、片田の故郷では、水道の開通でようやく気運が盛り上がったばかりで、住まいや設備は昔のままだった。

片田は上水道整備と同時に、各家庭の台所と屋根の改善に取り組んだ。そもそも周辺の昔ながらの住まいには台所を設けていない場合が多く、土間の片隅に小さな流し場があるだけだった。共同ポンプまで水を汲みに行く必要はなくなったが、調理環境は効率性と衛生上の問題を抱えていた。片田は改良かまどや調理場を整え、家事動線の効率化を目指した。そして明るい光が注ぐガラス窓を設けさせた。

また、かまどの普及で防火対策も必要になった。そのころ、周辺の住まいはほとんどが茅葺き屋根で、一部には杉皮も用いられた。そのままでは火の手が上がれば住まいを焼き尽くし、集落全体に及んでしまう。

そこで片田は生活改善の一環として瓦屋根への葺き替えを推進した。いわきから瓦職人を招き瓦工場建設に尽くしたが、ここでは建材販売で築いた業者とのつながりが役立った。そしてこうした努力が実を結び、小原村の生活改善運動は昭和三十一年、県のモデル地区に指定された。

片田は、昭和二四年に設立された宮城県森林組合技術員協会で副会長を務めていたが、そこでどんな働きをしたかを示す資料は少ない。そればかりか小原村の組合での働きでもわからないことが多い。それに代わり明らかになるのは、組合や林業の枠を超え故郷のために尽くした彼の苦闘である。彼の功績が組合や林業の枠に収まりきらないのは、林業の発展が村の発展と同義だったからだ。それは同時に、村の営みがほぼ林業によって支えられてきたことも明らかにする。

小原村における森林組合は、古くからの「契約講」が前身と考えることができる。「講」は、相互扶助を目的とした組織体だが、小原村では古くからその意思が生活全般に大きな影響を与えた。共有林の運用やそこで生まれる利益の分配、また暮らしに関わる共同事業も契約講の決定に委ねられた。ここでは林業、農業などの垣根はない。目指すのは共に暮らしを豊かにしていくことだけだ。片田は、それを原点に協同の輪を広げようとした。

月夜にまつすぐ伸びる木立のように

昭和四二年、五七歳のとき片田は脳梗塞を患った。右手と発語が不自由になった。懸命に治療を続けていたとき漢詩に出会い、リハビリを兼ね気に入ったものは色紙に書くようになった。

そもそも書を嗜んでいたかはわからないが筆運びは速かった。そして達筆ぶりが評判になり、結婚祝いや新築祝いに求められたという。書に集中する眼差しは仕事のと き同様に鋭かったが、御披露目するときは穏やかだった。

昭和四五年、長年副会長を務めた技術員協会が、宮城県森林組合職員連盟と名を改めたとき、片田はその会長になった。その設立総会、さらに大会では壇上に立ち挨拶をした。発語が不自由な彼に代わり、事務局の者が代読した。その間、指をピンと伸ばした手を両足の脇に揃え、背筋を伸ばしまつすぐ前を向いていた。声は違っても、言葉はまぎれもなく片田のものだった。

雅号は「林月」とした。どんな理由でそうしたのか。それを周囲に明かすことはなかったが、壇上で毅然とする姿は、月夜にすくと伸びる木立の静謐と凛々しさを感じさせた。